

文化庁委託事業

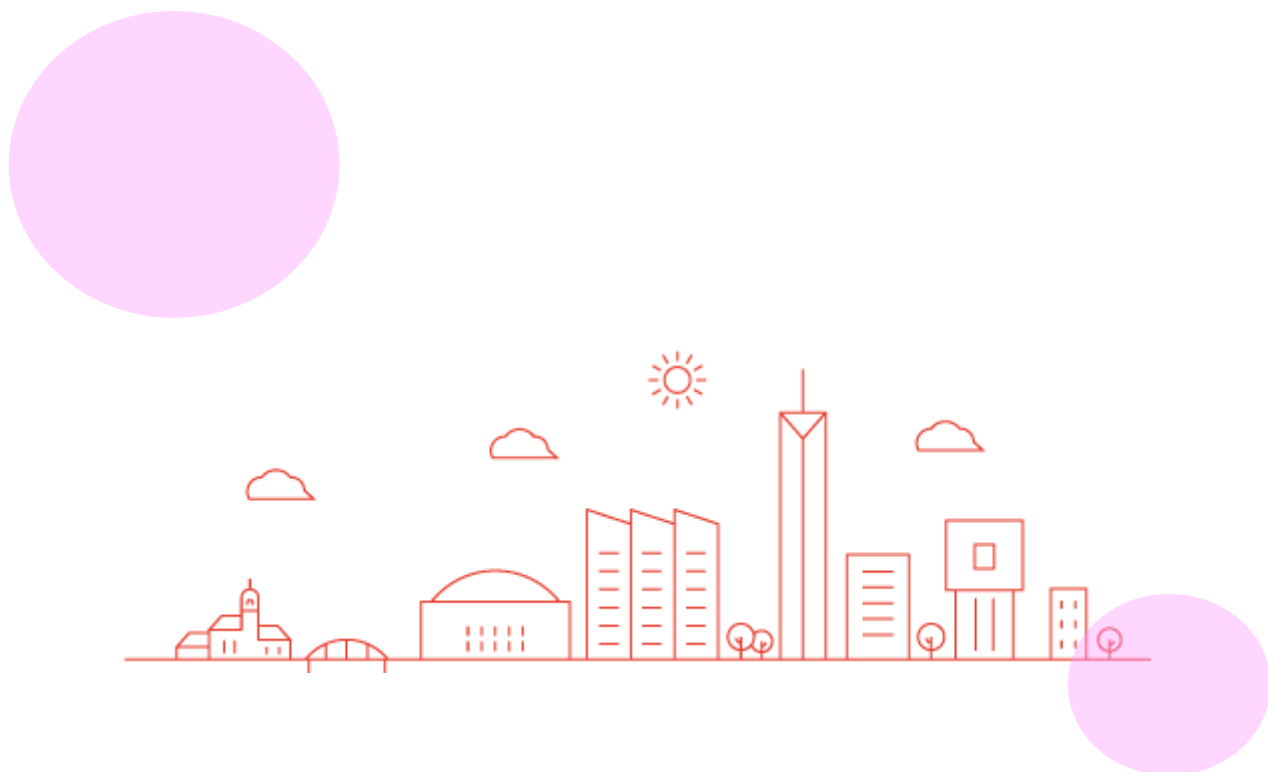
令和5年度

劇場・音楽堂等基盤整備事業

地域別劇場・音楽堂等アートマネジメント

研修会

実施報告書



公益社団法人全国公立文化施設協会

地域別劇場・音楽堂等職員アートマネジメント・舞台技術研修会（北海道地域）

実施要項	
事業名	令和5年度文化庁委託事業地域別劇場・音楽堂等職員アートマネジメント・舞台技術研修会（北海道地域）
趣旨	・劇場・音楽堂等の職員を対象として、アートマネジメント及び舞台技術に関する専門的な研修を行うことにより、地域の文化芸術の振興と劇場・音楽堂等の活性化に資する。 ・劇場・音楽堂等の職員を対象として、施設の管理運営を行う上で直面している課題について専門的な研修を行うことにより、地域の文化芸術の振興と劇場・音楽堂等の活性化に資する。
開催期間	令和5年11月8日（水）～11月9日（木）
会場	北海道立道民活動センター（かでの2・7） 所在地 〒060-0002 北海道札幌市北2条西7丁目 電話 011-204-5100
問合せ先 （事務局担当施設）	北海道立道民活動センター（かでの2・7） 電話 011-522-5156
参加人数	33名（参加施設 22施設）

研修日程・内容

日時	内容	講師	
11/8 （水）	9:50～ 10:00	開講式	
	10:00～ 12:00	講義Ⅰ 舞台上の安全管理について	札幌市民交流プラザ 舞台技術アドバイザー 伊藤 久幸 氏
	13:00～ 17:00	講義Ⅱ 劇場備品と設備について 基礎編 ・劇場備品の管理・取扱いについて ・手動バトンの取扱いについて	伊藤 久幸 氏 三精テクノロジーズ(株) 舞台機構事業本部 営業部次長 諸岡 聡昭 氏 (株)井手口 取締役舞台美術部部長 小栗 直人 氏
11/9 （木）	10:00～ 12:00	講義Ⅲ 著作権について	(一社)日本音楽著作権協会北海道支部 支部長 梶原 健司 氏
	13:00～ 15:00	講義Ⅳ これを聴けばわかる！ 中小規模館における若手の人材戦略 ～みんなが元気になるための秘策～北海道 ver.	あさひサンライズホール 館長兼芸術監督 漢 幸雄 氏 中標津町総合文化会館 館長 金曾 義仁 氏
	15:00～ 15:30	質疑応答	
	15:30～ 15:40	閉講式	

研修会記録

1 はじめに

- ・ 劇場・音楽堂等の職員を対象として、アートマネジメント及び舞台技術に関する専門的な研修を行うことにより、地域の文化芸術の振興と劇場・音楽堂等の活性化に資する。
- ・ 劇場・音楽堂等の職員を対象として、施設の管理運営を行う上で直面している課題について専門的な研修を行うことにより、地域の文化芸術の振興と劇場・音楽堂等の活性化に資する。

2 研修内容

講義 I 「舞台上の安全管理について 基礎編」

講 師 伊藤 久幸 氏（札幌市民交流プラザ 舞台技術アドバイザー）

————— 講義の内容等 —————

○ワイヤーの耐荷重について

吊物バトンで使用するワイヤーの耐荷重について

破断荷重 (t) = ロープの直径×ロープの直径÷20 が基準となる。

○釘打ち

- ・ 15mm 厚・木床に固定
- ・ 2 寸釘 50kg で釘が抜ける
- ・ 60mm コーススレッド 300kg で釘が抜ける

○すのこの安全管理

通路部分にはベニヤ板を敷く、作業道具用のボックスを設置するなど。

→人、道具の転落を防ぐ工夫。

○禁止行為について

スモーク、裸火、火薬、家電

※特殊なものは確認や対策が必要

例) ガストーチ：手から離れた際に火が消えるものでなければ申請が通らなかった

爆竹：飛散防止等の対策が必要

※電子レンジ使用時はブルトウスやインカムの電波に影響する可能性があるので注意

○消防への申請

誘導灯の消灯、避難通路に物の設置、客席内ステージの設置



講義 I

サーカスのような演出→生業にしているかどうかで可否の判断

講義Ⅱ「劇場備品と設備について 基礎編」

- ・劇場備品の管理・取扱いについて
- ・手動バトンの取扱いについて

講師 伊藤 久幸 氏（札幌市民交流プラザ 舞台技術アドバイザー）

諸岡 聡昭 氏（三精テクノロジーズ株式会社 舞台機構事業本部 営業部次長）

小栗 直人 氏（株式会社井手口 取締役 舞台美術部部長）

——— 講義の内容等 ———

○三精テクノロジーズ株式会社 会社概要の説明

○舞台機構の概要について

- ・断面図を用いた各部の説明（緞帳、幕、ボタン、照明ボタン、ライトブリッジ等）

○バトンの昇降方式についての解説

- ・手引き式、手動ウインチ式、手動カウンター式、電動トラクション式、電動ドラム巻取り式

○整備計画について

- ・必要性・・・トラブルの防止、予防のため
- ・整備計画の進め方・・・改修内容を決める際は安全・運用・美装（見た目）が基本。
- ・吊物装置の手動から電動に変更する際の注意点

機械を導入する際、すのこの耐荷重については舞台機構のメーカーでは判断できないため、建築事務所等への相談が必要。

○保守点検について

- ・基本的な保守点検の流れ

入館→情報入手→ミーティング→立入禁止表示の設置
→吊物点検→床点検→操作・制御点検→工具等片づけ
→試運転→立ち合い→退館

※使用時違和感等がある場合は事前に連絡しておく
スムーズに対処できる。



講義Ⅱ①

○株式会社井手口 会社概要の説明

○能舞台の設置、各地の設置例について
能舞台ができるまで、動画で一部始終の解説

○舞台大道具備品について
使われている木材は圧倒的に針葉樹が多い
→針葉樹の方が中の組織が単純でねじれなどが
おきにくいいため。

○木材の等級

・無垢材、合板はJ A S規格、ボード類はJ I S
規格で制定している。

・木材の等級：無節→上小節→小節→特一等材→一等材→二等材・・・

所作台などを購入する場合は等級や人工乾燥をかけるなど条件を設定したほうが良い。

○ステージデッキについて

実物を用いて特徴などの解説



講義Ⅱ②

講義Ⅲ「著作権について」

講 師 梶原 健司 氏（一般社団法人日本音楽著作権協会 北海道支部 支部長）

———講義の内容等———

○著作権の概要

- ・著作権の保護期間→著作者の死後 70 年
(著作者が死亡した年の翌年 1 月 1 日から 70 年)
- ・外国作品は相手国の保護期間が日本より短い場合は
その期間のみ保護される。

○J A S R A C について 団体概要の説明

○利用手続きについて

- ・作品検索システム（J-WID）の利用方法について
- ・演奏利用申込書・演奏利用明細書の記載方法について
→記載内容に基づいて使用料が分配されるため、正確な記入を行うことが重要
- ・グランドライツ（演劇的音楽著作物を演劇的に上演する権利）→J A S R A C で許諾で
きない場合もあるため、まずは相談を。

○演奏会使用料の分配

年 4 回（3 月、6 月、9 月、12 月）分配明細書と共に権利者へ分配

→データ化することにより、紙より詳細な情報を権利者へ提供する事が可能になった。



講義Ⅲ

○ J A S R A C ラーニングスクエアについて

著作権に関する出張講座。講演料や会場費(上限あり)は J A S R A C が負担している。

講義Ⅳ「これを聴けばわかる！中小規模館における若手の人材戦略～みんなが元気になるための秘策～北海道 ver.」

講 師 漢 幸雄 氏 (あさひサンライズホール 館長兼芸術監督)

金曾 義仁 氏 (中標津町総合文化会館 館長)

————— 講義の内容等 —————

○ 公立文化施設協会とは・・・概要や組織についての説明

○ 令和 5 年度研究大会資料の解説

- ・ 劇場・音楽堂等の職員の高齢化の進行
- ・ 劇場・音楽等の 3 ない問題：人・時間・お金がない
→ 経営環境部会からの提言

① 計画的に職員研修に取り組む

→ 経験年数に応じた職員研修に計画的に取り組む

② 地域別研修を活用する

現場で働く職員に寄り添ったプログラムの設定、講師の選定等 → 検討委員会の設置

③ 顔の見える職員の横のつながりを活かす

各研修でつながる人脈の活用、オンラインサロンの開催

○ 北海道に求められるハブ機能

令和 6 年 4 月から北海道文化財団による技術スタッフ紹介制度の導入

→ スポットでスタッフを必要とする館から北海道文化財団へ照会 → 状況に合った技術スタッフを紹介

→ この流れの積み重ねで各館と技術スタッフとの関係が出来上がり、数年後催物に見合った技術スタッフを各館で依頼できるようになるのが理想的。

○ 各館の研修状況等

・ 紋別市民会館

ホールのスタッフは委託しているが、委託先の会社のスタッフ数が数名のため、将来的な不安はある。

研修の必要性は感じているが、若手、ベテランともなかなか進んでいない。

・ 砂川市地域交流センター

研修に出席できる体制が整っているため、研修に参加しやすい環境である。



講義Ⅳ

研修を受講した内容等を帰った際にどうフィードバックするかが課題。

・道民活動センター

研修について体系として確立されているものはできていない。今後職員の研修を充足していくべきと考えている。

3 研修を終えて

① 事業評価

今回は講師全員が北海道内の方々で実施したが、参加者と講師とのつながりも作る事ができ、アンケートの結果満足度も高い内容を行うことができたので良い研修が実施できたと思う。また、今後研修の中でもあったように、各館からの希望を募るなどして、今、道内の公立文化施設職員が受けた研修を行なえるようにしていきたい。

② 当研修会の意義

講義Ⅰ、講義Ⅱでは舞台の安全管理や劇場備品と設備についての基礎についての研修で、利用者が安全かつ快適に利用するための知識等を学ぶことができた。

講義Ⅲの著作権に関する講義と研修では、著作権に関する知識やJASRACへの申請など著作物の正しい利用方法について学び、講義Ⅳでは劇場・音楽堂等の人材戦略について沖縄の研究大会での内容と共に、北海道における課題やオンラインサロンの活用についての講義、研修参加状況について意見交換等を行った。

参加者が各館に戻り、研修内容を生かすことにより、利用者へのより良質なサービスの提供を行なえるものとする。

③ 今後の課題について

アンケートの結果等を精査したり、事前に研修内容についての希望を募るなどして、今のような研修が望まれているのか、参加者のニーズを満たせるような、満足度の高い研修を実施できるようにしていきたい。

地域別劇場・音楽堂等職員アートマネジメント研修会（東北地域）

実施要項	
事業名	令和5年度文化庁委託事業地域別劇場・音楽堂等職員アートマネジメント研修会（東北地域）
趣旨	劇場・音楽堂等の職員を対象として、アートマネジメントに関する専門的な研修を行うことにより地域の文化芸術の振興と劇場・音楽堂等の活性化に資する。
開催期間	令和5年11月21日（火）～11月22日（水）
会場	釜石市民ホール TETTO 所在地 〒026-0024 岩手県釜石市大町 1-1-9 電話 0193-22-2266
問合せ先 （事務局担当施設）	岩手県民会館 電話 019-624-1173
参加人数	32名（参加施設 22施設）

研修日程・内容			
日時	内容	講師	
11/21 （火）	13:30～ 13:35	開講式	
	13:35～ 14:45	講義Ⅰ 「岩手が誇る郷土芸能とその 伝承について」	（公社）全日本郷土芸能協会常務理事 小岩 秀太郎 氏
	14:45～ 15:00	休憩	
	15:00～ 15:20	釜石虎舞について～ 釜石虎舞団体有志による演舞	釜石虎舞保存連合会有志
	15:25～ 16:25	ワークショップ 「グループに分かれて虎舞を 体験、過去の映像を上映」	小岩 秀太郎 氏 釜石虎舞保存連合会有志 釜石市民ホール 中村 仁彦 氏
	16:30～ 17:15	施設見学	釜石市民ホールスタッフ
11/22 （水）	9:30～ 10:15	講義Ⅱ 「釜石市内郷土芸能団体の現 状について」	釜石市文化スポーツ部文化振興課文化 財係長 手塚 新太 氏 司会：小岩 秀太郎 氏
	10:20～ 11:20	グループディスカッション 「郷土芸能伝承のこれから」 について	ファシリテーター：小岩 秀太郎 氏
	11:20～ 11:50	発表→講師による講評→質疑 応答	
	11:50～ 11:55	閉講式	

研修会記録

1 はじめに

「地域に根ざした伝統文化を体験する～郷土芸能の伝承とこれから～」と題して、講義及び事例発表、パネルディスカッション等を行った。

1日目は、講師に（公社）全日本郷土芸能協会常務理事 小岩秀太郎氏を迎え、『岩手が誇る郷土芸能とその伝承について』の講義を実施。後半では、釜石虎舞保存連合会の有志による演舞、グループに分かれて虎舞を体験するワークショップ、釜石虎舞の過去映像の上映後に、釜石市民ホーTETTOの施設見学を行った。



はじめに

2日目は、『釜石市内郷土芸能団体の現状について』と題して、釜石市文化スポーツ部文化振興課文化財係長 手塚新太氏による講義を実施。後半では、『郷土芸能伝承のこれから』についてグループディスカッション後、グループごとの発表を行った。

2 研修内容

講義Ⅰ「岩手が誇る郷土芸能とその伝承について」

講師 小岩 秀太郎 氏（公益社団法人全日本郷土芸能協会常務理事/縦糸横糸合同会社
代表/郷土芸能「鹿踊（ししおどり）」伝承者）

郷土芸能の定義から始まり、東日本大震災以降の郷土芸能の変化や抱える課題、郷土芸能に関する事業のマネジメント等を通じて、劇場・音楽堂における役割や郷土芸能との関わりを、考える貴重な機会となった。また、事例紹介を交えて、郷土芸能の公演を制作するポイント等を講義いただき、今後の取り組み方のヒントを得ることができた。



講義Ⅰ

「釜石虎舞保存連合会有志による演舞」

実演 釜石虎舞保存連合会有志

釜石虎舞について説明後、釜石市内7団体が加盟する「釜石虎舞保存連合会」有志によるダイナミックな演舞を鑑賞した。



演舞－①



演舞－②

ワークショップ：グループに分かれて虎舞を体験⇒第一回「郷土芸能の夕」の映像を上映

解説 小岩 秀太郎 氏（公益社団法人全日本郷土芸能協会常務理事/縦糸横糸合同会社
代表/郷土芸能「鹿踊（ししおどり）」伝承者）

釜石虎舞保存連合会有志

中村 仁彦 氏（釜石市民ホール）

グループに分かれて、虎頭を持ちそれぞれの団体の違いや釜石虎舞の所作を体験するワークショップを行った。神事でもあるため、虎舞の虎頭はこれまで部外者には触らせてこなかったが、釜石虎舞保存連合会 岩間会長の「参加者に虎舞を知ってもらい、繋がってもらいたい」という考えから、実際に触れ、動きながら体験することができたため、参加者は貴重な経験となった。



ワークショップ－①



ワークショップ－②

講 義Ⅱ「釜石市内郷土芸能団体の現状について」

講 師 手塚 新太 氏（釜石市文化スポーツ部文化振興課文化財係長）

釜石市における郷土芸能の特色や、地理的要因（沿岸部から内陸にかけて細長い地形になる点や、内陸部と沿岸部の違い）、時代背景（江戸時代から近代にかけて変わった点）など、細やかに説明がなされた。また、少子高齢化による担い手不足の問題に、劇場・音楽堂や行政がどのように関わるかを考えさせられる発表となった。



講義

グループディスカッション

ファシリテーター 小岩 秀太郎 氏（公益社団法人全日本郷土芸能協会常務理事/縦糸横糸合同会社代表/郷土芸能「鹿踊（ししおどり）」伝承者）

『郷土芸能伝承のこれから』について、それぞれの劇場・音楽堂がどのように関わっているのか、今後どのように伝統文化を支えることができるのかなど、郷土芸能の伝承に対する課題解決に向けて、活発な議論が交わされた。



グループディスカッション

各グループから発表⇒講師による講評⇒質疑応答

古くからの住人が継承してきた郷土芸能等の伝統文化が、ニュータウン化による新たな住民に理解されにくく、継承が困難になっている事例などが上がった。それぞれの地域が抱える課題の解決に対して、劇場・音楽堂がどう関わり、その役割を果たしていくのかを考える機会となった。また、郷土芸能のワークショップを開催し、効果があった事例など、情報交換の場にもなり、今後の展開のヒントが得られたようだ。



質疑応答

3 研修を終えて

① 事業評価

講義については、「地元の郷土芸能を見つめ直す良い機会となった」という感想が多かったこともあり、地域での展開につながる良い機会となった。

また、釜石虎舞のワークショップについては、「貴重な体験となった」との感想が多く、総じて研修内容は好評だった。

② 当研修会の意義

「普段かかわりが少ない郷土芸能に、ワークショップと座学の両方で触れることができ、大変有意義だった」「ホールと郷土芸能の関わり方が参考になった」といった意見が多かったことから、意義のある研修会であった。

地域での活動や、今後の自主事業の制作に生かされると思われる。

③ 今後の課題について

講義や事例発表だけではなく、郷土芸能の実演から体験までを行った研修内容は、参加者同士のコミュニケーションが図られ、地域が抱える問題等の情報交換の場にもつながったが、劇場・音楽堂の規模に応じた事例発表も取り入れ、更なる活動のヒントが得られる内容にする必要があった。

地域別劇場・音楽堂等職員アートマネジメント研修会（関東甲信越静地域）

実施要項	
事業名	令和5年度文化庁委託事業地域別劇場・音楽堂等職員アートマネジメント研修会（関東甲信越静地域）
趣旨	劇場・音楽堂等の職員を対象として、アートマネジメントに関する専門的な研修を行うことにより地域の文化芸術の振興と劇場・音楽堂等の活性化に資する。
開催期間	令和6年3月6日（水）
会場	国立劇場 伝統芸能情報館 所在地 〒102-8656 東京都千代田区隼町 4-1 電話 03-3265-7411
問合せ先 (事務局担当施設)	国立劇場 電話 03-3265-6751
参加人数	-名（参加施設 -施設）

研修日程・内容			
日時	内容	講師	
3/6 (水)	13:00～ 13:10	開講式	
	13:10～ 13:50	講義Ⅰ 伝統芸能を題材としたWSを行っているホールの事例報告 「千葉県文化振興財団の伝統芸能の取り組みについて」	千葉県文化会館 糸日谷 智孝 氏
	13:50～ 14:05	休憩	
	14:05～ 14:55	講義Ⅱ 地元で伝わる伝統芸能を振興する事例報告 「「かながわ伝統文化こども歳時記」の取り組みについて」	神奈川県立青少年センター 藤岡 審也 氏
	14:55～ 15:10	休憩	
	15:10～ 15:55	質疑応答・総括	コメンテーター (有)古典空間代表取締役 小野木 豊昭 氏
	15:55～ 16:00	閉講式	

地域別劇場・音楽堂等職員アートマネジメント研修会（東海北陸地域）

実施要項	
事業名	令和5年度文化庁委託事業地域別劇場・音楽堂等職員アートマネジメント研修会（東海北陸地域）
趣旨	劇場・音楽堂等の活性化、地域の文化芸術の振興等を目的としたアートマネジメントや劇場・音楽堂等の舞台技術を統括管理するために必要な専門的知識・技術の取得に関する研修会を実施し、専門性の向上と劇場・音楽堂等の活性化を図る。 アートマネジメント研修会については、各地域において、劇場・音楽堂等の優れた自主事業等を企画する能力、管理運営能力の養成を図るため、劇場・音楽堂等の職員等を対象とした研修会を実施する。
開催期間	令和5年10月5日（木）
会場	福井県立音楽堂「ハーモニーホールふくい」 所在地 〒918-8152 福井県福井市今市町 40-1-1 電話 0776-38-8288
問合せ先 (事務局担当施設)	愛知県芸術劇場 電話 052-971-5609
参加人数	74名（参加施設 37施設）

研修日程・内容			
日時	内容	講師	
10/5 (木)	13:30～ 13:45	開講式	
	13:45～ 15:00	研修会Ⅰ インボイス制度に関する講演会	金沢国税局 課税部 消費税課 軽減税率・インボイス制度係長 古川 祐規 氏
	15:00～ 15:15	休憩	
	15:15～ 16:30	研修会Ⅱ 顧客層に届く広報とは？	愛知県芸術劇場 広報・マーケティング部 部長 林 健次郎 氏
	16:30～ 16:45	休憩	
	16:45～ 17:45	研修会Ⅲ【芸術公演】 芸術公演&登録アーティストとのディスカッション（大ホール）	プレゼンテーター （公財）福井県文化振興事業団 事業部副部長 佐々木 玲子 氏 パイプオルガン演奏 長谷川 佳子 氏 越のルビーアーティスト演奏会 ソプラノ：白根 奈々 氏 マリンバ：Pulse Du 平岡 愛子 氏 山崎 智里 氏

研修会記録

1 はじめに

劇場・音楽堂等の活性化、地域の文化芸術の振興等を目的としたアートマネジメントや劇場・音楽堂等の舞台技術を統括管理するために必要な専門的知識・技術の取得に関する研修会を実施し、専門性の向上と劇場・音楽堂等の活性化を図った。

アートマネジメント研修会については、各地域において、劇場・音楽堂等の優れた自主事業等を企画する能力、管理運営能力の養成を図るため、劇場・音楽堂等の職員等を対象とした研修会を実施した。

2 研修内容

研修会Ⅰ インボイス制度に関する講演会

講師 古川 祐規 氏（金沢国税局 課税部 消費税課 軽減税率・インボイス制度係長）

- ・消費税とインボイス制度の概要説明
- ・インボイス制度の目的や適用範囲
- ・売手買手双方の制度の導入による影響についての解説
- ・適格請求書の記載事項の確認
- ・チケットの委託・受託販売に係る帳票に必要な事項の確認

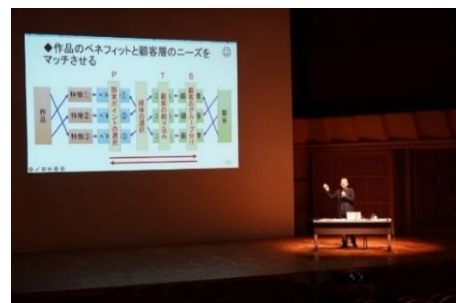


研修会Ⅰ

研修会Ⅱ 顧客層に届く広報とは？

講師 林 健次郎 氏（愛知県芸術劇場 広報・マーケティング部 部長）

- ・劇場の広報には「事業」と「施設」の2種類が存在
- ・広報の領域は業務担当ごとに異なる
- ・さまざまな切り口のセグメンテーションについて解説
- ・顧客層とベネフィットのマッチング方法



研修会Ⅱ

研修会Ⅲ【芸術公演】芸術公演&登録アーティストとのディスカッション

プレゼンター：佐々木 玲子 氏（公益財団法人福井県文化振興事業団事業部副部長）

パイプオルガン演奏：長谷川 佳子 氏

越のルビーアーティスト演奏会

ソプラノ：白根 奈々 氏

マリンバ：平岡 愛子 氏 山崎 智里 氏（Pulse Du）

・越のルビーアーティストバンクとその活動の紹介
福井県にゆかりがあり、室内楽の演奏や作曲ができ、オーディションに合格もしくは越のルビー音楽祭に出演経験がある18歳以上のプロを登録アーティストとして（公財）福井県文化振興事業団が仲介役となり、県内で公演を実施できる環境を広く提供している。

・パイプオルガンによる実演

ウエストミンスターの鐘他2曲

・ソプラノ&マリンバによる実演

オペラ「ジャンニ・スキッキ」からお父さん

他6曲



パイプオルガン演奏



越のルビーアーティスト演奏会

3 研修を終えて

① 事業評価

研修項目がバラエティに富んでおり、タイムリーな内容もあり新しい知識を得ることで、改めて今後の職務に活かせる内容であった。

インボイス対応や広報等、的を絞った研修では専門的な分野の知識やスキルを習得することができた。特に自分の担当と異なる業務に関する知識は、職場内での円滑なコミュニケーションに寄与できる。

また、広報戦術の知識やソフトスキルを理解・習得することにより、組織内での事業や業務の継承といった、今後の人材育成にも役立つ内容の研修であった。

② 当研修会の意義

芸術公演 & 登録アーティストとのディスカッションで紹介された「越のルビーアーティストとバンク」制度は、福井県内のクラシック音楽の多様なニーズに応えるためのアーティスト登録制度で、公演実施についてのノウハウ等に乏しい若手アーティストと公演主催者のマッチングや斡旋を行い、公演の機会を広く県民に提供している。また、その登録には厳しい審査を必要とし、演奏は常に高いクオリティーを保っており、鑑賞者と主催者（演奏者）は互いに Win Win の関係にある。

このように埋もれた優れた人材を発掘し、活用できる事業を展開することで、地域の文化意識の向上を図ることができる。

③今後の課題について

受講者からの、

- ・座学の場合はメモを取れるテーブル等を必ず手配して欲しい。
- ・より活発に情報交換するため参加者名簿の配布があればよかった。
- ・広報の研修では論理的な説明内容で、今後の広報の組み立て方の参考になったので、時間があればそれを踏まえたもっと具体的な話を聞きたかった。（質疑応答の時間を長めにとって欲しい）

といった要望を踏まえ、今後の研修プログラム構成に活かしたい。

地域別劇場・音楽堂等職員アートマネジメント・舞台技術研修会（近畿地域）

実施要項	
事業名	令和5年度文化庁委託事業地域別劇場・音楽堂等職員アートマネジメント及び舞台技術研修会（近畿地域）
趣旨	近畿地域の公立文化施設の職員等を対象として、アートマネジメント能力と技術能力の向上に関する専門的な研修を行い、地域の文化芸術の振興と公立文化施設の活性化に資する
開催期間	令和5年12月15日（金）
会場	兵庫県立芸術文化センター 所在地 〒663-8204 兵庫県西宮市高松町 2-22 電話 0798-68-0223
問合せ先 （事務局担当施設）	DMG MORI やまと郡山城ホール 電話 0743-54-8000 兵庫県立芸術文化センター 電話 0798-68-0223
参加人数	128名（参加施設 60施設）

研修日程・内容			
日時	内容	講師	
12/15 （金）	10:00～ 12:00	講義4【研修会】 クレーム対応研修「賢者は経験に学ぶ、百聞は一験にしかず」	宇治市文化会館館長 近畿支部 専門委員 橋本 恭一 氏
	12:00～ 13:00	休憩	
	13:00～ 14:00	講義5【講演】 芸術文化によるひとづくり、まちづくり～芸術文化観光専門職大学の挑戦～	芸術文化観光専門職大学学長 平田 オリザ 氏
	14:00～ 14:15	休憩	
	14:15～ 15:30	講義6【パネルディスカッション】 公立文化施設の人材育成 ～大学と公立ホールの連携がもたらすこと～	パネリスト 平田 オリザ 氏 東りいたみホール館長 権田 康行 氏 神戸市民文化振興財団演奏担当 部長 森岡 めぐみ 氏 コーディネーター 芸術文化観光専門職大学副学長 藤野 一夫 氏

※12月14日は支部との合同開催のため割愛

研修会記録

1 はじめに

近畿地域公立文化施設の職員等を対象として、アートマネジメント能力と技術能力の向上に関する専門的な研修を行い、地域の文化芸術の振興と公立文化施設の活性化に資することを目的し、演奏備品が与える音響効果をはじめ、経験に基づく実践的なクレーム対応、芸術文化がもつ可能性を活用した「まちづくり」と「ひとづくり」などを取り上げて研修会を実施しました。

2 研修内容

講義4【研修会】クレーム対応研修「賢者は経験に学ぶ、百聞は一験にしかず」

講師 橋本 恭一 氏（宇治市文化会館館長 近畿支部専門委員）

クレーム問題が広がってきた背景、発生する状況や要因、クレームの対応、悪質化した場合の対応について、講師の体験談を交えて、対応方法やポイントについて具体的に説明。また、実際に発生したクレームの例を挙げ、議論を交えながら解説。発生したクレームに対しては、問題を共有するとともに個人ではなく組織で対応することが重要である。



講義4

講義5 芸術文化によるひとづくり、まちづくり～芸術文化観光専門職大学の挑戦～

講師 平田 オリザ 氏（芸術文化観光専門職大学 学長）

- ・1000人収容の旧城崎大会議館をリニューアルし、アーティストが滞在し、舞台芸術のための創作活動ができる世界でも珍しいレジデンス施設として城崎国際アートセンターがオープン。世界中から申し込みがあり、年間稼働日数は、それまでの20日から初年度330日に増加する。滞在するアーティストが教育普及活動としてのワークショップなどを実施することで、世界的なアーティストと出会える町となる。
- ・豊岡の教育政策の到達点として芸術文化観光専門職大学が開学。
アートマネジメントと観光を学ぶ大学で、毎年全国の様々な高校から学生が集まり大きな人口インパクトになっている。特徴としては、ホテルオークラなどでの実習や企業との商

品開発などで人材育成に取り組んでいる。また、日本では、初めての演劇とダンスの実技を本格的に学べる大学で、文化観光の中でも芸術文化のスペシャリストを育成する大学でもある。

- ・但馬地方の観光課題としては、短期滞在から、海外の富裕層による長期滞在への移行が重要であり、これには、日本が弱い芸術文化のジャンルに力を入れ、昼間のスポーツと夜のアートを充実させる必要がある。

- ・豊岡の文化政策における水平分業

市町村合併により余った施設を機能別毎に、鑑賞事業は市民文化会館や永楽館、ワークショップなどの交流機能は豊岡市民プラザ、創造発信機能は城崎国際アートセンターに分割。また旧の町役場を演劇祭の開催できる江原河畔劇場に改装し分業化する。

- ・アジアのハブとなるような演劇祭を豊岡で開催。

江原河畔劇場が出来たのを機にアジア有数のフリンジ型の国際演劇祭を目指して開催。

成功のための要件である、正式招待された演目を開催できる施設、様々な宿泊施設、ネットワークがあることの全てが揃っている。演劇祭には、芸術文化観光専門職大学の学生も授業の実習として参加している。温泉だけではなくアートを引き金にした地域の魅力を再発見できるような、観光とまちづくりが連動したアートフェスティバルである。



講義 5

講義 6 公立文化施設の人材育成 ～大学と公立ホールの連携がもたらすこと～

パネリスト 平田 オリザ 氏（芸術文化観光専門職大学 学長）

権田 康行 氏（東りいたみホール 館長）

森岡 めぐみ 氏（神戸市民文化振興財団 演奏担当部長）

コーディネーター 藤野 一夫 氏（芸術文化観光専門職大学 副学長）

「大学と公共文化施設が連携して出来ることは何か」について探るディスカッション。まず、藤野氏より指定管理者制度 20 年の功罪（専門人材の枯渇・払底）についても問題提起があり、「アートマネジメントを専攻する学生が、臨時実習で現場の学びを充実したものにするために、文化施設およびその職員と緊密に連携するには」、「文化施設や財団内部での人材育成プログラムに対して、大学がどのように連携・貢献できるのか」の 2 点について、ディスカッションを行う。

○森岡氏 文化施設におけるアートマネジメントの実情に触れ、課題解決のためアートマネジメント講座、芸術文化観光専門職大学など大学生によるインターンシップ事業を開催。公共ホールにおける人材育成での課題解決には、まず、組織の管理層がアートマネジメントの大切さを認識する必要があるため、管理層の意識改革が重要である。

また、今後の人材育成対策には、「大学でのアートマネジメント教育の充実」と「公立文化施設での意識・行動変革」の両方が必要。

○権田氏 芸術文化観光専門職大学の実習生の受け入れについては、フロント業務の手伝いを中心に行い、「大ホールでの企画提案」、「鳴く虫と郷町の観光資源としての活用」を目標に実施。受け入れのメリットとしては、「学生の視点が新たな考えに活かせる」、「レクチャーをすることで自分自身学び直しの時間が作れた」などがあり、デメリットとしては、担当職員の負担が大きく職場の理解と協力が不可欠であることが挙げられる。

- ・那覇大会(経営環境部会)における『劇場・音楽堂等の3ない問題』などについて説明。
- ・人材育成にあたっての2つのポイント

入職するまでは、劇場で働くという魅力を伝える必要があるので、優秀な人材を獲得するには大学との連携は必要であるが、劇場がポジティブな場所であることを示していく必要がある。入職してからは、アートマネジメントを学ぶ機会があること、各種研修に参加できる環境、同業の仲間達とのネットワークが大切である。

また、現場で出来ることから取り組む、ポジティブに取り組むことが重要。

○平田氏 大学としては、長期の研修を検討しており、様々な業務を通して、労働の厳しさ、ホール勤務の単調な部分を経験し、この様な部分も含めて就職を考えることが重要である。

- ・人材育成は公共ホールの責務であることを全体が理解する必要がある。今後は、教員研修のように人材育成を制度化し、長期的な視野にたって連携して全体で人材育成をする必要がある。
- ・里帰り実習として、出身地の劇場などで受け入れてもらうことで将来の雇用につながると考えられる。
- ・今後、人材育成を制度設計していく時代になって行く。今回の研修が、大学側と公共文化施設が、どのような制度にするべきか、話し合っていけるようなきっかけになるといいと思う。



講義 6

① 事業評価

舞台技術とアートマネジメントの合同での研修で、基礎的なことから、専門的なことまで幅広い内容での講義であった。舞台技術研修では参加者より「参考になった」「わかりやすい」との声があり、演奏備品に対する認識が高まったと考えられます。

2日目のクレーム対応では、身近な事例が取り扱われ、参考になったとの意見が多くみられた。

また、講演、パネルディスカッションでは、人材育成の重要性とアートマネジメントのノウハウを次世代へつないでいくための公共ホール、大学の役割について再考できた。

② 当研修会の意義

公共ホール以外の団体なども関係しているテーマであるため、ホール以外からの参加も見られた。今回の研修内容を各館で抱えている問題解決や今後の展開に生かすことで、市民により良い事業の提供やサービスの改善に繋げることができると考えられる。

③ 今後の課題について

1 日目は、舞台職員を中心に演奏備品が音響に与える影響について、備品の解説に加え、実演演奏を実施することで、その効果を体感することが可能であったと考えます。今後も、演奏者・観客ともより良い環境でコンサートをできるよう、様々なテーマで技術的な研修会を継続していく必要性があります。

2日目は、ホール職員を中心に行われ、日常的に起こりえるクレーム対応と、芸術によるひとづくり、まちづくり、大学との連携による人材育成など、それぞれのホールが抱えている問題を学んだ。今後、公共ホールとしては、アートマネジメントの人材育成のための研修の実施や学生の積極的なインターンシップの受け入れなど人材の育成および活用を図る必要があります。

地域別劇場・音楽堂等職員アートマネジメント研修会（中四国地域）

実施要項	
事業名	令和5年度文化庁委託事業地域別劇場・音楽堂等職員アートマネジメント研修会（中四国地域）
趣旨	劇場・音楽堂等の職員を対象として、アートマネジメントを行う上で直面している課題について研修を行うことにより、地域の文化芸術の振興と劇場・音楽堂等の活性化に資する。
開催期間	令和5年12月7日（木）～12月8日（金）
会場	愛媛県県民文化会館 第6会議室 所在地 〒790-0843 愛媛県松山市道後町 2-5-1 電話 089-923-5111
問合せ先 (事務局担当施設)	公益財団法人愛媛県文化振興財団 電話 089-927-4777
参加人数	60名（参加施設 35施設）

研修日程・内容			
日時		内容	講師
12/7 (木)	14:10～ 15:40	講義1 「ファシリテーターの仕事と問題解決の糸口をテーマに」	ブランディング特化型ファシリテーター 岩下 紗矢香 氏
	16:00～ 17:30	講義2 「問題解決に必要なプロセスを探る」	岩下 紗矢香 氏 ショートショート作家 田丸 雅智 氏 (株)日昇 PR 事業部マネージャー 垣内 幸子 氏
12/8 (金)	9:30～ 11:45	講義3 「ショートショート発想法」	田丸 雅智 氏

研修会記録

1 はじめに

劇場・音楽堂等の職員を対象として、アートマネジメントを行う上で直面している課題について研修を行うことにより地域の文化芸術の振興と劇場・音楽堂等の活性化に資する。

今回は、事業担当者の悩みを参加者で共有し、講師の方々と解決へのプロセスを探ることとした。

2 研修内容

講義 1 「ファシリテーターの仕事と問題解決の糸口をテーマに」

講師 岩下 紗矢香 氏（ブランディング特化型ファシリテーター）

「ファシリテーターの仕事について」
「ワークショップや会議のすすめ方について」の説明をした。



講義 1

講義 2 「問題解決に必要なプロセスを探る」

講師 岩下 紗矢香 氏（ブランディング特化型ファシリテーター）

田丸 雅智 氏（ショートショート作家）

垣内 幸子 氏（株式会社日昇 PR 事業部マネージャー）

2名の参加者からの悩みを座談会形式で、話し合った。

「事業の集客について」
「地域に密着できる事業とは何か」
「市民の皆様が芸術文化へ興味を持ってもらうための取り組みについて」



講義 2

講義 3 「ショートショート発想法」

講師 田丸 雅智 氏（ショートショート作家）

参加者が実際に今の仕事（会館業務・事業など）に関連するテーマで短くて不思議な小説「ショートショート」を執筆しそこから未来のヒントを考えていくワークショップを実施した。



講義 3

3 研修を終えて

① 事業評価

アンケートより

- ・実際の悩みに対し、建設的な意見が複数出る座談会は現在の業務にも参考にできる箇所が多々あり勉強になった。
- ・ファシリテーションの話では、自分が悩んでいたことについての話が上がっていて、勉強になった。
- ・問題も内容も良いものでした。現場でもいかせそうです。
- ・田丸さんのコメントが非常に参考になりました。
- ・ショートショートのワークショップがこれまでにない発想を思いつくことができ、とても参考になりました。施設スタッフ一同がこのようなワークショップを受けられることができれば、おもしろい企画が生まれそうですね。

- ・講義Ⅱの座談会が部外者感があった。また、質問者の問いに、講師が満足に答えられていたかは疑問に思う。
- ・講師のお話は現場問題と離れている気がする。具体的な経験を元に話しをして欲しい。

事業担当が日頃抱えている悩みについて解決する糸口を探す、というテーマで実施した研修会でしたので概ね参加者の皆様には好評でしたが、満足度の低いご意見（講師について）もありました。そもそもこの講義の内容を、事業の成功体験を聞くような研修会ではないものにしたかったので、そのようなものを期待していた方には物足りなかったであろうと思いました。

② 当研修会の意義

参加者の皆様の中には、持ち帰ってすぐできる。参考になりました。と言って下さる方もおられて、持ち帰りすぐに生かせることを学んでいただけたかと思います。

イベントで集客するのは「手段であって目的ではない」という言葉が講師の方からあり、集客はもちろんですが、続けていくことやその他のところで地域の皆様に文化事業を提供していく、ということのを再認識できた研修会でした。

③今後の課題について

参加者の皆様により多くの満足度で帰っていただけるテーマや講師で企画する必要があると思いました。

地域別劇場・音楽堂等職員アートマネジメント研修会（九州地域）

実施要項	
事業名	令和5年度文化庁委託事業地域別劇場・音楽堂等職員アートマネジメント研修会（九州地域）
趣旨	劇場・音楽堂等の職員を対象として、アートマネジメントに関する専門的な研修を行うことにより、地域の文化芸術の振興と劇場・音楽堂等の活性化に資する。
開催期間	令和5年9月28日（木）～9月29日（金）
会場	宝山ホール（鹿児島県文化センター）第3会議室 所在地 〒892-0816 鹿児島県鹿児島市山下町 5-3 電話 099-223-4221
問合せ先 （事務局担当施設）	宮崎県立芸術劇場 電話 0985-28-3216
参加人数	56名（参加施設 32施設 1団体）

研修日程・内容			
日時	内容	講師	
9/28 （木）	13:10～ 14:30	講演 「連携共同体の形成から考える公立文化施設の公共性」	芸術文化観光専門職大学 副学長 教授 藤野 一夫 氏
	14:40～ 15:40	事例発表Ⅰ 「地域への想いを受け継ぐ仲間が、時代を作る」	C-WAVE ネットワーク協議会 会長 福井 宏征 氏 事務局長 櫻川 勝志 氏
	15:50～ 16:50	事例発表Ⅱ 「文化芸術に係る地域住民参画型モデル事業」	広島県環境県民局文化芸術課 主査 栞木 悠丞 氏 はつかいち文化ホールウッド ワンさくらぴあ 副館長 重村 幸雄 氏
9/29 （金）	9:20～ 10:30	事例発表Ⅲ 「文化・芸術の力で人も地域ももっと好きになる - 福島県いわき市 igoku の事例を通じて -」	いわき市保健福祉部地域医療 課事業推進員 猪狩 僚 氏
	10:30～ 12:00	パネルディスカッション 「これからの『連携』を考える～つながることから生まれる新しい文化～」	藤野 一夫 氏 福井 宏征 氏 櫻川 勝志 氏 栞木 悠丞 氏 重村 幸雄 氏 猪狩 僚 氏

研修会記録

1 はじめに

コロナ禍を経て公立文化施設や文化芸術が発揮する効果を求める期待値は高くなってきているが、公立文化施設を取り巻く環境は厳しい状況が続いている。このような状況の打開策として、事業環境部会でも取り上げている「連携」について着目し、今回の研修では公立文化施設同士・公立文化施設と行政組織・公立文化施設と他分野の3つの関係性で「連携」を行っている事例の発表を行った。

2 研修内容

講義「連携共同体の形成から考える公立文化施設の公共性」

講師 藤野 一夫 氏（芸術文化観光専門職大学 副学長）

藤野氏の研究のメインフィールドであるドイツの劇場文化の事例や、自身が携わっている芸術文化観光専門職大学でのアートマネジメント教育や神戸国際芸術祭のマネジメントの事例を挙げながら、持続可能な地域社会の地産地消地育のサイクルについて紹介。地域医療の分野では、心身の健康のみならず、コミュニティの中で自分の役割・居場所を持つことで自己肯定感を高める「社会的処方」の可能性に注目がされているが、それを効果的に機能させるのは芸術文化である。そこで日本の地域社会におけるアートマネジメントのあり方を考察し、公立文化施設のこれからの「連携のかたち」について、参考となる事例等を提示された。



講 義

事例発表 I 「地域への想いを受け継ぐ仲間が、時代を作る」

講師 福井 宏征 氏（C-WAVE ネットワーク協議会 会長）

櫻川 勝志 氏（C-WAVE ネットワーク協議会 事務局長）

C-WAVE ネットワーク協議会は、平成5年4月に東九州を中心に設立された文化拠点のネットワークである。年間を通して、定期総会、芸術文化団体や文化振興・基金についての情報収集、ネットワーク事業やホールと学校とが連携した特別公演、加盟館職員の研修などを実施している。定例会では、業務に関するトラブルなどといった現場レベルの情報共有や協

力関係が構築されている。運営については事業連携のみの加盟を検討するなど柔軟な意見も挙がっている。今後は専門職の人材育成、プロデュース能力の向上や、社会的弱者といわれる人々にも届けることができるようなきめ細やかな事業の実施を目指している。



事例発表 I

事例発表Ⅱ「文化芸術に係る地域住民参画型モデル事業」

講師 榎木 悠丞 氏（広島県環境県民局文化芸術課 主査）

重村 幸雄 氏（はつかいち文化ホール ウッドワンさくらびあ 副館長）

広島県の総合計画では「多くの県民が文化芸術活動に親しんでいる姿」を掲げている。広島県が実施した県民意識調査や施設へのヒアリングの結果、県民の公立文化施設への期待度の高さ、その一方で施設側の様々な運営課題が浮き彫りとなったため、地域間の連携および施設の活用促進を図ることで文化芸術に親しむ環境整備を行っている。今回は「文化や芸術を通してつながる会議」として住民が参加する企画会議について、3市町の事例を発表。本事業の実施期間は令和4年度から2カ年となっており、研修会当日時点ではまだ事業が進行中であったが、はつかいち文化ホールウッドワンさくらびあ副館長の重村氏より、実際に行われた企画会議の様子や、今後の課題が報告された。



事例発表Ⅱ

事例発表Ⅲ「文化・芸術の力で人も地域ももっと好きになる - 福島県いわき市 igoku の事例を通じて -」

講師 猪狩 僚 氏（いわき市保健福祉部地域医療課 事業推進員）

福島県いわき市の地域包括ケアシステムとして発足したデザインチーム igoku は、ウェブと紙媒体の広報誌による情報発信のみならず、医療福祉や社会包摂といった、まちづくりに関わる様々なプロジェクトデザインに携わっている。今回は、文字による発信だけではなく

五感・身体に直接訴えかけようと、「老い」や「死」について実際に体験する場づくり「igoku フェス」について取り上げられた。igoku の取り組みには、いわき芸術文化交流館（いわきアリオス）のフォローシップもあり、いわきアリオスを通してカメラマンや芸術団体とのコラボレーション企画が実現している。企画制作における地域や公立施設とのネットワーク・コミュニケーションや、時には実施する事業や自分自身の根幹にある信念に立ち返ることの重要性などを自身の経験や図解を通して解説された。



事例発表Ⅲ

パネルディスカッション「これからの『連携』を考える ～つながることから生まれる新しい文化～」

パネリスト：藤野 一夫 氏（芸術文化観光専門職大学 副学長）

福井 宏征 氏（C-WAVE ネットワーク協議会 会長）

櫻川 勝志 氏（C-WAVE ネットワーク協議会 事務局長）

栗木 悠丞 氏（広島県環境県民局文化芸術課 主査）

重村 幸雄 氏（はつかいち文化ホール ウッドワンさくらぴあ 副館長）

猪狩 僚 氏（いわき市保健福祉部地域医療課 事業推進員）

藤野氏をモデレーターとして、各事例発表者へ事業内容や活動について会場参加者やパネリストから質問を受けながらディスカッションが進行。C-WAVE ネットワーク協議会は、直営・指定管理が混在する施設同士の結びつきの難しさやマネジメント手法の違いや、実際の予算組みの動きや日程・公演ジャンルの調整などが話された。広島県のモデル事業では、参加した伴走支援の企業・アーツカウンシルについての話題に触れられた。藤野氏からは、中小規模館における連携や予算分担について、国際共同研究や国際交流で行われるような、経費負担の線引きについて助言がされた。

猪狩氏は、参加者からも質問があった igoku フェスの計画進行におけるアジリティや今後の再現性の他、地域社会との繋がりについて言及され、特に行政職員の異動における引継ぎの難しさや、実際に地域社会側から見た公立文化施設に対する期待度や具体的な取り組みなどについて話された。

最後に藤野氏より、地域文化の観光面・福祉面における文化芸術の役割を、公立文化施設が他分野組織へ積極的に発信していき、横断的・多層的連携を密にしていくことの重要性を

改めて提示された。また、本研修会について、日本の地域文化が持続的に存続していくための道筋を見つける出発点にあたりと総括された。



パネルディスカッション①



パネルディスカッション②

3 研修を終えて

① 事業評価

アンケート結果を見ると、今回の研修会でテーマに置いた「連携」の大切さ、公立文化施設の役割について気づかされたという意見が多く、公立文化施設が持つ使命のひとつを改めて認識する機会とすることができた。同時に、各地域・各会館での現状課題と重ねた時の難しさ・もどかしさを感じている参加者が多く見受けられた。また、講師と連絡を取り合うなど早速行動に移している参加者もあり、問題解決への原動力に少しでも貢献することができた。

② 当研修会の意義

今回の研修では、行政組織からの講師やアーツカウンシル団体の参加があり、現代社会が抱える課題について、公立文化施設の役割を主軸に多角的に見つめなおすことができたと考ええる。これを踏まえた今後の活動から、他分野や市民らへの波及効果が期待される。

③ 今後の課題について

参加者からの意見にも挙げたが、約3年のコロナ禍による空白期間もあったので、知見を深めるためにグループワークや施設見学を取り入れることも検討したい。事前の打ち合わせ・準備や時間が必要にはなるが、参加者の熱が熱いうちに実践的に取り組むことができるため、取り入れていく価値はあるだろう。